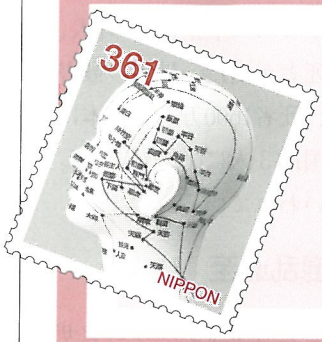


「第二次日本経穴委員会」便り

～第48回　前胸部の取穴の矛盾～

第二次日本経穴委員会　副委員長　篠原昭二（しのはらしょうじ）

現在、第二次日本経穴委員会（形井秀一、篠原昭二、坂口俊二）、東洋療法学校協会（坂本歩、船水隆広、高橋大希、町田しのぶ）、日本理療科教員連盟（喜多嶋毅、山岡正人、香取俊光）の三者が定期的に集まって経絡経穴学の教科書編纂作業を行っている（敬称略）。昨年の８月29日に第１回会合を開催して、次回の９月13日で第11回目の会合となるが、教科書編纂内容の大筋はすでに完成されており、種々の調整作業を行っている段階である。

英語公式版の発刊までの過程

経穴部位の英語公式版がWHO/WPROによって発刊されるまでの過程についてはすでにご存知の方も多いと思われるが、６回の非公式会議および３回のTFTミーティングを通して中国語版原案ができ上がり、その英文化作業を行った後、やっと一昨年11月につくば公式会議において英語公式原案の合意形成が行われた。それを受けて、第二次日本経穴委員会において最終的な確認作業および日本語訳を行っていく過程で、英語版の種々の矛盾点が明らかになったことから、４回目のTFTミーティング（マニラ）において最終調整を行い、公式版発刊の運びとなった。しかし、マニラ会議の折にいくつかの問題点が浮かび上がったものの、最終的には編集者（WHO/ WPRO）の責任において発刊することが宣言されていた。

マニラ会議後の変更はどれか

食竇（SP17）から周栄（SP20）までは、マニラまでの最終英語版では、注記の中に「Note：SP17, ST18, KI22 and CV16 are all located in the fifth intercostal space. These foure acupuncture points are located along the curve of the fifth intercostal space」とされ、日本語版教科書原案も「食竇（SP17）、乳根（ST18）、歩廊（KI22）、中庭（CV16）は、第５肋間の高さに並ぶ」と注記されていた。

しかし、マニラ会議後の英語公式本の中から、いつの間にか「中庭（CV16）」のみ削除されていることが明らかとなった。

したがって、日本語版および教科書編纂において、英語公式版に準拠しなければならないことから、急遽、最終英語原案と英語公式版との変更点を探す作業をすることとなった。

前胸部任脈経は肋間の高さ？

前述のごとく、前胸部の脾経、胃経、腎経、任脈の各経穴が「肋間に並ぶ」と記述されてい

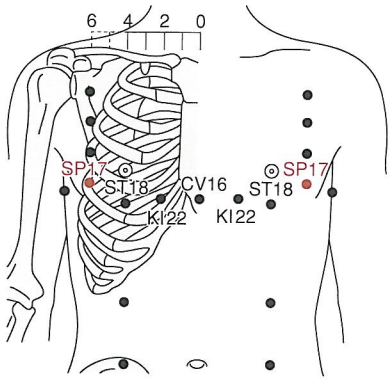
たなら、前胸部の取穴法の記載は非常に単純に理解することができる。しかし、玉堂を例に取ると、「CV18：玉堂　前胸部、前正中線上、第3肋間と同じ高さ（In the anterior thoracic region, at the same level as the third intercostal space, on the anterior median line）」と記述されている。部位表記が肋間の高さであるというのであれば、胸郷（SP19）の注記から「CV18：玉堂も第3肋間の高さに並ぶ」という表現を削除する必要があるのかどうかが、問題とされるところである。

肋間自体が弯曲して走行しており水平でないことから、厳密に言えば問題もある。たとえ、第3肋間に並ぶという表現を削除したとしても、「前胸部前正中線上で第3肋間の高さ」というとき、第3肋間の高さとは、一体どの部位をさすのであろうか？　この点については、注記の削除によって解決されたわけではなく、今後の大きな課題と思われる。

中庭は胸骨体下端正中線上？

古典に記述された前胸部の任脈経の取穴にはほとんど違いはなく、中庭が膻中の下1寸6分、膻中が玉堂の下1寸6分、玉堂が紫宮の下1寸6分、紫宮が華蓋の下1寸6分、華蓋が璇璣の下1寸、璇璣が天突の下1寸となっており、天突から順々に下にとっていくことが明らかである。そして、古典の記述と今回の決定との大きな違いは、中庭が「膻中の下1寸6分」から、「前正中線上、胸骨剣状突起結合部（胸骨体下端）中点」に変更されたこと、さらに、華蓋が古典ではほとんどが「璇璣の下1寸、陷なる者の中」であるのに対して、「前正中線上、第1肋間と同じ高さ」と変更されたことである。

中庭の位置については、中国・韓国とも胸骨



体下端で、第5肋間説をとっていたことから、この説が採用されたものであるが、日本では、天突から華蓋までを2寸とする古典に忠実な取穴法を採用していた(?)ため、中庭は、胸骨体下端よりも6分上もしくは、『標準経穴学』に示すごとく「膻中と胸骨端点との間で、胸骨端点から約1/4（0.6/2.2）」を提唱していたものである。取穴のしやすさから見れば、胸骨体下端のほうが容易であるが、はたしてどちらが正しいのかということになると、問題が残る。

華蓋は第一肋間？

華蓋を第一肋間とすると、紫宮と華蓋の間は1寸6分となるが、古典の記述が璇璣の下1寸としているため、矛盾することとなる。もっとも、取穴の容易さという点からは、胸骨体下端から天突までが9寸で、天突の下1寸に璇璣をとり、次いで璇璣から胸骨体下端までの8寸を5等分すると、各1寸6分となり、肋間に対応した取穴が可能となる。

結局、古典や臨床的な観点に基づくというよりも、より簡便な方法を採用したのではないかという気がしてならない。特に、華蓋を璇璣の下1寸とするか、1寸6分とするかが大きな問題であり、今後の研究に期待したい。